

千葉市美術館所蔵 新版画 —進化系 UKIYO E の美—

日本橋高島屋 2021. 08. 25～09. 12 大阪高島屋 2021. 09. 15～09. 27



「新版画」とは、江戸時代に培われた浮世絵の伝統的な技術と版元や画家らの新鮮な感覚を融合させ、大正～昭和の初めにかけて興隆した木版画である。現在では国内はもとより、「Shin-hanga」として海外でも数多くのファンを得ているが、本展では、20年以上をかけてこの「新版画」を収集してきた千葉市美術館のコレクションから選び抜かれた「約120点」の優品を通して、その成立から発展までの歴史をたどる内容の企画である。

橋口五葉 ^{かみす} 《髪梳けるおんな》 1920（大正9）年 木版（多色）



画面のつけ櫛で髪をとかす若い女性が、銀一色から浮かび上がるように見える姿は、流れるように美しい黒髪、女性特有の身体のやわらかな線、そして撫子（なでしこ）模様を散らした浴衣の冴合は手ざわりまでも伝わってくる。

最大の見どころは、質感や弾力性にボリューム感が表現された、流れるようにウェーブした黒髪の表現で、「毛彫り」技法によって作成されたものである。

本作品は、アール・ヌーヴォー様式を思わせる流麗な描線と清楚な色彩を用い、非常に上品に官能性と身体美を表現している。

伊東深水 《対鏡》 1916（大正5）年 木版（多色）



画伯は、「鏑木清方」の弟子で、「歌川国芳」の流れをくむ大正・昭和初期の浮世絵師で、本作品は、18歳時の最初期の作品で、これを皮切りに「新版画」の作品を発表するようになった。

画面の豊かな髪の色、白き柔肌、着物の赤の色彩が響き合い、覗いたうなじ（首筋）が艶かしく、淡い唇や簪（かんざし）の黄色が花を添えている。

背景には、バレンの刷り跡を残して、物憂い表情と呼応するかのようで、どこか崩れた女性の姿を通して、それを見つめる青年の危うい心情が見えてくる。